

塚本恭章

『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド 100』

(読書人, 2023年) /

『いまこそ「経済学の冒険」を語る——本を読み, 文章を書く』

(読書人, 2025年)

横川太郎

1. はじめに

本稿は、愛知大学の塚本恭章氏による『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド 100』(2023年, 読書人, 656頁)と、その副読本に位置づけられている『いまこそ「経済学の冒険」を語る——本を読み, 文章を書く』(2025年, 読書人, 298頁)の書評となる。

『経済学の冒険』については、すでに15本を超える書評が発表されており、その多くがオープンアクセスによって閲覧可能になっている。そのため、当該書の経済学史的意義などについては、その分野を専門とする評者に譲り、本稿ではそれらではあまり取り上げられていない3つの点に焦点を当てたい。それぞれ、第1に訳者から見た『経済学の冒険』の意義、第2に大学教育に対する両著書の意義、第3に塚本氏が目指す経済学史の姿についてである。そのため、まず第2章では両著書の概要と特徴についてみた上で、続く第3章で上記の3つの視点から検討を行う。

2. 両著書の概要と特徴

2.1. 『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド 100』の概要と特徴

『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド 100』(以下、『経済学の冒険』)は、著者が過去15年にわたり執筆してきた100本を超える経済学書のブックレビュー(書評)とブックガイドを中心として編まれた書となる。このうち、ブックレビューの60本は、「市場と貨幣——経済学の大地にふれる」(第1章)、「資本主義と社会主義——対立する世界のゆくえ」(第2章)、「経済思想と経済学説——競合性と多様性のはざままで」(第3章)、「人間社会と自伝・評伝——勉強と読書のきっかけを掴む」(第4章)の4つのテーマごとに収録されている。

塚本恭章『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』（読書人，2023年）／…

また、「経済学の冒険は延長戦へ——ブックガイド40のタイブレーク」（第5章）として、200字から1500字程度の比較的コンパクトなブックガイド40本が収録されている。

上記のブックレビューとブックガイドに加え、本書には補章、特別編、歴史年表、人物ガイドが収録されている。補章の「時代を彩る書物たち——年末回想号『経済学』（2016～2022）」では、副題にもあるように同期間の週刊読書人の年末回想号が収録されている。各号には、その年に刊行され、話題となった経済学書を中心に、関連する書籍がピックアップされている。それにより、ブックガイドとして機能するだけでなく、各年における社会・経済上の関心事項や経済学のトレンドを振り返ることができる。さらに、特別編として、「経済学はなにをどのように探究する学問か——著者の〈思考〉を追体験する知的冒険の世界」として、『経済学とは何か』（根井雅弘，中央公論新社，2008年）と『雇用身分社会』（森岡孝二，岩波新書，2015年）についての書評を元にした論考、伊藤誠氏との対談、岩井克人氏の最終講義のレポートが収録されている。最後に経済学史に関わる重要な書物・文献の歴史年表と、本書のブックレビューで取り上げられた経済学者についての詳細な人物ガイドが収録されている。

このように、本書は極めて充実した内容となっている。塚本氏はプロローグにおいて、本書が「1冊をつうじて、1本の『経済学史』となるよう」目指したとも述べており、それが各ブックレビューの最後に関連レビューを示していることや、前述の歴史年表や人物ガイドにも表れている。そのため、本書は「書評本」であると同時に、ブックレビューを中心とした「経済学史」の書であり、さらに塚本氏が経済学史の研究とともに行ってきた書評や対談、学部生や一般向けの執筆活動などのライフワークともいべき活動の現時点での集大成の書でもありと考えられる。

本書は、経済学に興味があり、かつ教科書レベルの知識はあるが、個別のテーマや研究者についての専門書をほとんど読んだことがなく、どの本から手を付けるべきか悩んでいる社会人や学部の3、4年生、大学院修士課程の院生にとって、最良のパスファインダーになると考えられる。そのような層にとって、本書に収録された対談や講義録、そして多くのコラムは知的好奇心を刺激するものだと思われる。本書を読んで興味を持った本を読み、さらに関連する本を読み進めることで、本書で言うところのその人独自の新たな本脈が生み出されることが期待される。

2.2. 『いまこそ「経済学の冒険」を語る——本を読み、文章を書く』の概要と特徴

『いまこそ「経済学の冒険」を語る——本を読み、文章を書く』（以下『冒険を語る』）は、『経済学の冒険』の副読本に位置づけられている。『経済学の冒険』は、前述のように極めて充実した内容であり656頁に及ぶ大著となっていた。そのため、学部生にとって読破が難しいという問題に著者が直面し、その橋渡しのために本書が出版された。

第1章の「自著を語り直す——『経済学の冒険』のスケルトン」は、第2章に収録された吉川洋氏との対談に向けた草稿で、自著の内容を再整理しつつ、対談者への問いを示すことで自著の問題意識を明らかにしている。第2章の「対談をつうじて——水野和夫、吉川洋と『経済学の冒険』」では、両氏との対談がそれぞれ収録されている。対談を通じて、著者の問題意識についての議論を深める姿を見ることができる。第3章の「書評という世界——資本主義とこれからの社会のゆくえ」では、『経済学の冒険』から厳選した3本と、新たに5本を加えた8本のブックレビューが収録されている。第4章の「書評とリプライ——『経済学の冒険』をめぐる往復書簡」では、評者も勤務する東京経済大学経済学部の栗田健一氏と著者との往復書簡が収録されている。書簡は『経済学の冒険』についての書評と、それに対するリプライという形になっており、対談とは異なる形で『経済学の冒険』についての議論を深める様子を見て取ることができる。第5章の「経済学の宇宙へ——岩井克人『欲望の貨幣論』と経済学史」は、岩井克人氏の研究についての著者による長文の論考と、『資本主義の中で生きるということ』（筑摩書房、2024年）の刊行を記念した岩井氏の研究に関する論考とその書評、著者と岩井氏の対談の4本によって構成されている。

本書は、本を読み慣れていない大学生が『経済学の冒険』を読む前段の書となっており、対談や往復書簡など初学者にも比較的読みやすい文書を収録している。また、本書の副題である「本を読み、文章を書く」にもあるように、本を読み、考えを巡らせ、文章を書くことの大切さと、それをどのように行えば良いかを大学生が学び取れるような書となっている。『経済学の冒険』の内容に引きつけていけば、本の読み方が分からない学生に、その人独自の新たな本脈を作る「最初の取っかかり」を与えてくれる書となる。それが特に表れているのは、第5章の「経済学の世界へ」だと考えられる。『経済学の冒険』の特別編の副題で標榜されていた「著者の〈思考〉を追体験する」ことが、初学者にも分かりやすく体験できるようになっている。その意義については第3章2節で改めて論じたい。

3. 両著書を巡る3つの視点

概要と特徴を踏まえ、ここでは3つの視点から両著書について論じたい。第1が『経済学の冒険』に収録されたブックレビューの訳者としての視点、第2が同じ大学教育に携わる教員からみた両著書の教育上の意義という視点、第3が両著書の中で語られた経済学史の研究書の構想と塚本氏が目指す経済学史という視点である。

3.1. 訳者からみた『経済学の冒険』の意義

『経済学の冒険』には、評者が関わった本のブックレビューが収録されている。それがハジュン・チャン『はしごを外せ——蹴落とされる発展途上国』（日本評論社、2009年）である。

塚本恭章『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』（読書人，2023年）／…

当時、評者は大学院の博士課程2年生で、翻訳に関わるのも初めてであった。出版直後に塚本氏から書評について連絡をもらい大変心強かったことを憶えている。

ハジュン・チャン氏（現・ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS））は、『世界経済を破綻させる23の嘘』（2010年，徳間書店）や『ケンブリッジ式 経済学ユーザーズガイド』（2015年，東洋経済新報社）の著者として日本でも良く知られているが、本書は最初に翻訳・刊行された本であった。

本書は、塚本氏とそのブックレビューの中で「現在の発展途上国にとって、『良い政策』と『良い制度』はいかなる（べき）ものかという論争の絶えない難題に対し、先進国の発展途上プロセスの膨大な歴史的事例を綿密に概観・省察することから解きほぐす本格的作品だ」（294頁）と言いつつ、膨大な過去の研究蓄積に裏付けられた研究書となっている。上記の問題に対し、本書は、その国の発展段階にかかわらず、自由放任主義こそが良い政策だとする発想は、歴史的にみれば誤りで、今日の先進国はキャッチアップ期には積極的な産業・貿易・技術政策を活用していたと指摘する。また、種々の制度についても、多くの場合、経済の発展段階に応じて生じる社会的な要請やその受容によってはじめて導入可能となるだけでなく、特定の制度には別の制度の同時的発展が必要な場合もあることを指摘している。

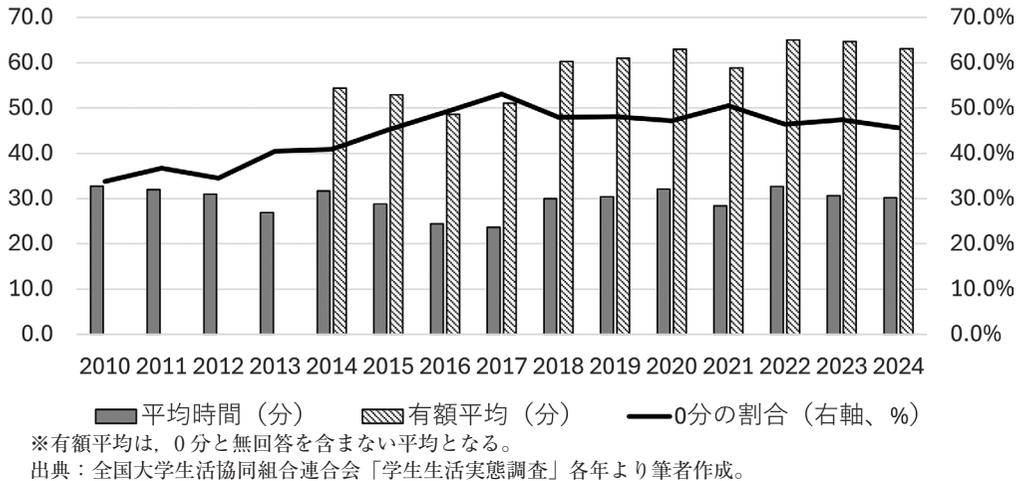
こうした歴史的省察により得られた知見は、今日においてももちろん有効性を失っていない。むしろ、啓蒙書や教科書でチャン氏を知った人を含め、多くの人に読んで貰いたい本である。本書のブックレビューが収録されることで本書に再び光が当たり、多くの読者の本脈に加わることを期待したい。

3.2. 大学教育に対する両著書の意義

両著書には、大学生などの若い読者が、本を読むことから遠ざかりつつある現状に対する危機感と、それに一石を投じたいという著者の思いが共通する特徴として存在する。例えば、『冒険を語る』第2章の対談の中で、塚本氏は『経済学の冒険』について、「私の本は、〔本を〕読まない人／〔本の〕読み方を知らない人、両者に向けて書かれたとも言え」とし、「今の学生と接していると、古典だけでなく、活字からちょっと遠ざかっている印象が強い。日本語で読み、考え、書くことを避けているようにも見受けられます」（同47-48頁，括弧内筆者）と危機感を表明している¹⁾。そのため、経済学部を中心とした学部教育における本を読み、考え、書くことの現状と、生じつつある問題について検討し、その上でこれらの問題に対する両著書の意義について考えたい。

まず、学部生による読書について、全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」の結果を確認する（図1）。それに基づく、学部生の1日の平均読書時間は、2010年の32.8分から2017年に23.6分まで低下したが、その後は30分前後で推移し2024年には30.2

図 1 学部生の 1 日の読書時間の推移 (2010-2024 年, 分)



分となっている。そのため、一見 15 年前と大きく変わらないように見える。しかし、1 日の読書時間が 0 分の学部生の割合をみると、2010 年の 33.8% だったものが、2017 年には 53.1% に達し、その後も 45%~50% の間を推移している。つまり、本を読むことから遠ざかっている学部生の数は確実に増加しているのである。

一方、今後より問題となる可能性が高いのが、『経済学の冒険』(176-177 頁) や『冒険を語る』の第 1 章でも指摘されていた生成 AI の利用拡大である。近年の生成 AI の性能向上は目覚ましく、それに伴い学部生による利用も増加傾向にある。実際、全国大学生生活協同組合連合会によれば、生成 AI を利用したことがある学部生の割合は、2023 年調査で 46.7% だったものが、2024 年調査では 68.2% と大幅に増加した (表 1)。利用目的別に見た場合もほぼ全ての項目で、2024 年調査が 2023 年調査を上回っている (表 2)。現時点では、理系学生の利用割合が高いが、文系学生による「論文・レポート作成の参考に」するための利用が着実に増加しており、2023 年の 20.2% から 2024 年には 26.5% となっている。また、2024 年調査から追加された「授業や研究」での利用も 25.9% となっている。調査そのものが最近始まったばかりのため、来年以降も同様のペースでの拡大が続くかは不明であるが、生成 AI の進歩の速さや現場での利用状況から考えると、今後も利用が拡大していく可能性が高い。

学部教育の観点からみた生成 AI の利用に伴うリスクとして、批判的思考力 (critical thinking skills) の獲得に悪影響が及ぶ可能性があげられる。生成 AI 利用のリスクというと、「幻覚 (ハルシネーション)」に注目するものが多い。ハルシネーションとは、「何らかの客観的基準に照らして『虚偽』または『不正確』とみなされる生成物 (文章, コードなど)」 (Sarkar et al., 2024, pp. 1-2) を AI が出力することを意味する。しかし, Sarker et al. (2024) も指摘するように、検証ができるような事実の誤りは、長期的には克服可能な課題である。

表1 文章生成系 AI の利用状況

	2023	2024
利用経験あり	46.7%	68.2%
利用経験なし	52.9%	31.5%
無回答	0.4%	0.3%

出典：全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」（第59回，第60回）より筆者作成。

表2 文章生成系 AI の利用目的（複数回答）

	2023			2024		
		文系	理系		文系	理系
授業や研究				31.9%	25.9%	41.0%
論文・レポート作成の参考に	22.1%	20.2%	26.6%	29.7%	26.5%	34.5%
翻訳・外国語作文	12.1%	12.0%	13.8%	18.9%	17.2%	22.4%
プログラミング，Excel の関数作成	7.9%	3.7%	15.1%	10.5%	4.1%	20.6%
就職・インターンシップなどの ES 作成の参考に	4.0%	5.5%	2.8%	5.4%	6.9%	4.2%
メールなどの文章作成	6.3%	6.0%	7.3%	11.6%	10.2%	13.7%
相談・雑談相手	11.0%	11.0%	12.0%	7.2%	7.2%	7.5%
遊び・趣味				18.8%	17.5%	21.2%
その他	3.8%	3.3%	4.5%	0.8%	0.8%	0.9%
無回答	2.9%	2.8%	3.1%	4.3%	3.9%	4.7%

出典：全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」（第59回，第60回）より筆者作成。

むしろ，問題となるのは「正しい」方法というものがほとんど存在しない問題を解決する上で必要な批判的思考への影響となる。

Lee et al. (2025, pp. 3-4) は，文章作成における生成 AI の利用について，コンテンツの生成，アイデアの創出，文章構成などのタスクの支援を通じて，初心者とエキスパートの生産性を高めることができると指摘する。しかし，同時に，初心者が生成 AI に依存し，論理的な主張の構築や主題の理解といったクリティカル・ライティングの能力を獲得しなければ，長期的なスキルの向上を妨げてしまう可能性を指摘する。実際，知識労働者を対象とした調査でも，「ChatGPT の支援を受けて作成した文章について同僚から否定的なフィードバックを受けたが，『ChatGPT が書いた文書をどのように改善すべきか，私には分からない』（*Ibid.*, p. 11）という事例が存在していた。これは，生成 AI が出力した文章を批判的に評価し，適切に修正するための思考力や能力が十分に備わっていないことを示唆している。

今後、生成 AI を「思考の代替手段」として依存する人が増えれば、批判的思考力が十分に身につかず、たとえ問題があると分かっていたとしても、依存から抜け出せなくなる人が増える可能性が高い。こうした問題を避けるには、生成 AI を「思考の代替手段」ではなく、自らの思考プロセスを活性化・加速させ、「思考を深化させる触媒」として利用するとともに、自身についても十分な批判的思考力を身につけることが必要となる。そのため、本や書物を読み、思考を巡らせ、文章を書くことの重要性を学生に伝えることが以前にも増して必要になっていると考えられるのである。

塚本氏の両著書は、そのような時代にあって、大学入学までにあまり本を読んでこなかった学生が、いかにして本を読み、思考を巡らせればよいのかの手本を示している。それが明確に表れているのが、『冒険を語る』の第 5 章と『経済学の冒険』の特別編であると考えられる。特に、『冒険を語る』の第 5 章では、岩井克人氏の研究に関する論考が複数収録されている。一見、内容が重複しているように見えるが、読み進めるうちに岩井氏の議論への理解が深まることに気付かされる。詳細な論考を通じて研究を把握し、それらを背景とした書評を読むことで、文章の中に込められた岩井氏の研究に対する塚本氏の理解が浮かび上がる。さらに、岩井氏との対談を通じて、理解がさらに明確になり、議論が深化する過程を体験する。こうした思考プロセスの追体験を通じて、どのような点に注目して本を読み、思考を巡らせ、思考を深化させるか、さらにはそれを文章として表現するのかを学び取ることができる。それこそが『経済学の冒険』の特別編の副題「著者の〈思考〉を追体験する」の意図するところだったのではないだろうか。その上で、読者も岩井氏の本を手に取り読むことで、塚本氏がどの部分をどのように解釈したのかを知り、そこから学ぶだけでなく、異なる注目点や解釈を見つけることで、それが独自の批判的思考ひいては独自の本脈を築くことに繋がっていく。両著書の教育的意義は、上記のようなプロセスを実践を通じて読者に伝えることにあると考えられる。

3.3. 塚本氏が目指す経済学史の姿

『経済学の冒険』のエピローグで、塚本氏は『競合する経済思想——資本主義と社会主義との知的格闘から』と題する学術研究書の刊行を計画中だと述べている。同著作が刊行され、読める日が楽しみであるが、同書が目指すところは『経済学の冒険』と『冒険を語る』の随所において見る事ができる。そこで、両著書から読み取ることができる今日の経済学史の問題点、塚本氏が目指す経済学史の姿について検討したい。

今日の経済学史が抱える問題については、『冒険を語る』第 1 章で、吉川氏が警鐘を鳴らす「経済学」について塚本氏が言及する中で特に明確に述べられている。塚本氏は、「考察対象を狭く設定し、現実からも遊離し、歴史上の経済学者の文献考証に多大な時間を浪費する傾向すら見受けられます。その帰結として、『経済学史』における有意義で生産的な知

塚本恭章『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』（読書人, 2023年）／…

的交流は希薄か皆無であり、『経済学史の発展』には何らかの寄与はあるにせよ、概して『経済学の発展』にはほとんど貢献していない」（同 42-43 頁）と、現状を憂慮している。また、第 2 章の水野和夫氏との対談でも、塚本氏はそれぞれの分野での研究が「非常に細分化していつている。その結果、経済学全体として、現在の資本主義や経済の危機そのものに対して発信できなくなっている面があるのではないか……経済学史というのは、ひとつには全体を見ながら、経済学のこれからの在り方を展望する学問だった。それがそうではなくなってしまった」（同 54-55 頁）と表明している。

つまり、経済学史研究が細分化し、過去の文献考証に多大な労力が割かれる一方で、それらの成果を理論的に統合し、現実の資本主義や経済の問題と向き合うという取り組みが希薄になっている。それにより、経済学史が「経済学の未来を展望する学問」でなくなっていることに、塚本氏は危機感を抱いていると考えられる。そこから塚本氏が目指す「理論家による経済学史」の姿が見えてくる。

両著書では、その実現について 2 通りの方法が示されている。1 つが「議論」または「対話」を通じた議論や理解の深化である。経済学説には多様な思想・学派が存在しており、多くの場合、競合し合っている。こうした多様性・競合性を維持しながら、経済学史研究が競合し合う経済思想・学派の間の「議論」や「対話」を推進することで、理論的な発展を促すことが可能になる。

もう 1 つが、忘却されてきた原理・洞察・思考の（再）発見である。経済学の歴史には、今日の主流派経済学が主流派になる過程で抑圧され、抹殺されてきた原理や洞察、思考が存在する。そのため、経済学（史）における「思考」の基本的な対立構造を析出・抽出した上で、これまでの歴史の中で抑圧・抹殺されてきた原理や洞察、思考を（再）発見し、その理論的意義を明らかにするとともに、反対に葬り去られるべき原理や洞察、思考を（再）発見し、その理論的誤謬を明らかにすることが求められる。

これらの「経済学史」研究を通じて、「経済学」そのものを内省できる学問とし、それにより現実の資本主義や経済の問題に向き合うことを可能にし、ひいては未来志向の議論ができる学問とする。それこそが、塚本氏が目指す理論家による経済学史の姿であると考えられる。

4. 最後に

本稿では、塚本恭章氏の『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』とその副読本『いまこそ「経済学の冒険」を語る——本を読み、文章を書く』について、訳者から見た意義、大学教育に対する意義、塚本氏が目指す経済学史の 3 つの視点から考察してきた。両著書が、大学生などの学問の扉を開けようとする者の手本となりパスファインダーとなることで、本を読み、思考を巡らせ、文章を書く力を培うことに繋がり、さらにはその人独自の本脈を形

成することに繋がることを期待したい。また、塚本氏が目指す「理論家による経済学史」が『競合する経済思想』として出版され、読める日を心待ちにしている。

注 _____

- 1) また、『冒険を語る』第1章でも「『本を読まない』ことは『本を読めなくなる』事態を誘発し、さらには『本を読む必要はない』という間違っただ通念を生み出しかねません」との危機感とともに、『経済学の冒険』について「本・書物を読むことの大切さを薦める、私なりの「ひとつの実践」にほかなりません。とりわけ経済学部 of 学部生、あるいは経済学部への進学を考えている高校生らに手に取ってほしいと思っています」(同 16-17 頁) と表明している。

参 考 文 献

- Lee, Hao-Ping (Hank), Advait Sarkar, Lev Tankelevitch, Ian Drosos, Sean Rintel, Richard Banks, and Nicholas Wilson (2025) “The Impact of Generative AI on Critical Thinking: Self-Reported Reductions in Cognitive Effort and Confidence Effects From a Survey of Knowledge Workers,” In Proceedings of the 2025 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems, Association for Computing Machinery, Article 1121.
- Sarkar, Advait, Xiaotong (Tone) Xu, Neil Toronto, Ian Drosos, and Christian Poelitz (2024) “When Copilot Becomes Autopilot: Generative AI’s Critical Risk to Knowledge Work and a Critical Solution,” In Proceedings of the Annual Conference of the European Spreadsheet Risks Interest Group.